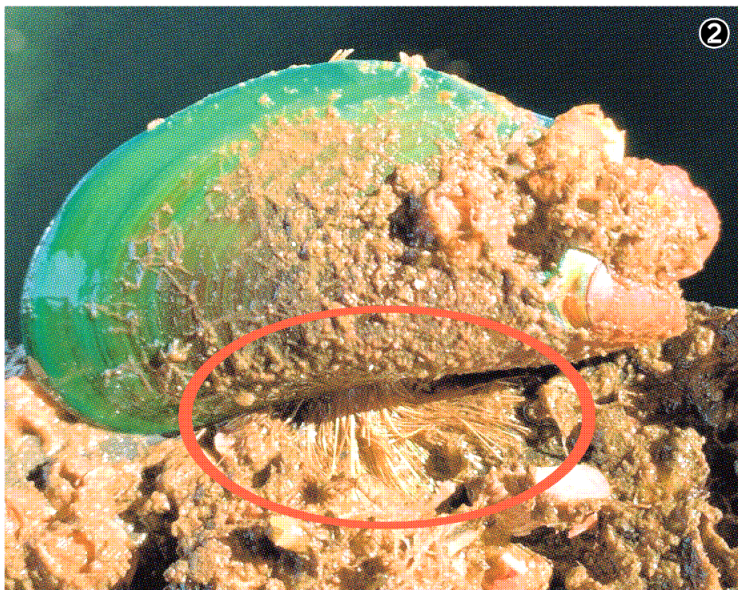
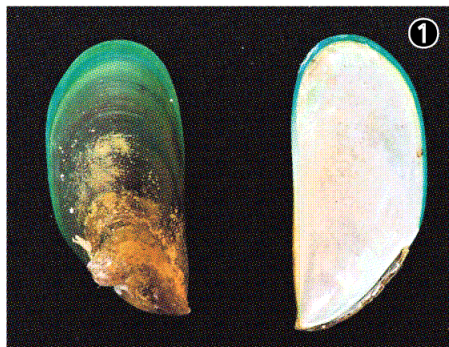




①ミドリイガイの貝殻②ミドリイガイの足糸(丸で囲んだ部分)。これで岩などにくっつきます③イルカ水路の仕切り網に貝や海藻がびっしりと付着している様子④貝を取り除いたイルカ水路の仕切り網



屋外展示エリアのイルカ水路は鹿児島湾とつながっていますが、ごみの流入を防ぐために網で仕切っています。網に海藻やフジツボ類などの生き物が付着すると網目が詰まってしまい、潮の満ち引きや波の影響を強く受けて、破れたり、ほつれたりしやすくなるので、定期的に取り除いています。最近では6〜7センチほどの緑色の貝が付着しているのを見かけます。

この貝はミドリイガイといいます。スペイン料理のパエリアに使われているムール貝(ムラサキイガイ)の仲間です。足糸と呼ばれる粘着性のある糸を出し、岩などに付着して生活しています。透き通るような緑色の



ミドリイガイ 80年代に日本に定着

殻をもつ美しい貝は、もともと日本には生息していませんでした。

原産地は西太平洋・インド洋の暖かい海の沿岸域で、1980年代以降に日本各地に定着しました。要因としては大型船がバランスを取るために取り込む海水(バラスト水)に稚貝(子ども)の貝が入り込んでしまったことなどが考えられています。

1月22日の生き物通信でも取り上げましたが、人間の活動によって本来生息していなかった場所に持ち込まれた生き物を外来種といいます。

外来種であるミドリイガイが環境に適応して増えてしまうと、在来の生き物が生活する場所を圧迫します。また、カキ養殖の網に付着して成長を阻害する、定置網の漁業効率の低下を招くなど、水産業への影響も考えられます。外来種という点、ブラックスバスやアメリカザリガニが有名ですが、身近な海の中にも問題が潜んでいるのです。

(海獣展示係飼育員・伊藤大介)